様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 ２５ 日現在

機関番号：１４４０３
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2012～2014
課題番号：２４３２０１４８

研究課題名（和文）近現代アメリカ社会運動史の再検討－大西洋世界と太平洋世界をつなぐ視点から－

研究課題名（英文）Rethinking on the history of American social movement: from a perspective that connects the Atlantic World and the Pacific Ocean World

研究代表者
田中　ひかる（TANAKA, HIKARU）

大阪教育大学・教育学部・教授

研究者番号：００２７２７７４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　10,100,000円

研究成果の概要（和文）：第1に、アメリカ合衆国で様々な社会運動に加わったヨーロッパとアジアからの移民が、彼らの送出国での社会運動と結びつき、そこから影響を受けながら発展したことを明らかにした。第2に、大西洋世界と太平洋世界の移民が、アメリカ国内で一つの運動を形成したこと、それらの運動が、移民の送り出し地域に対して影響を及ぼしたことを、とくに日本と中国について明らかにした。第3に日本に滞在して日本における運動に接点を持ったアメリカ出身者が、本国の社会運動から影響を受けていた可能性があるという点を指摘した。

研究成果の概要（英文）：Firstly, this study demonstrated that the immigrants, who came from Europe, Africa, Caribbean to the United States and participated to the social movements in the United States, associated to the social movements of their homelands; being influenced transnationally by the social movements of their homelands, immigrants’ social movements developed in the United States. Secondly, it was also revealed that the immigrants who came from Atlantic rim and Ocean rim constructed their social movements commonly in the United States; these movements influenced of the social movement in their homelands, especially in Japan and China. Thirdly, it is pointed out, that there are some materials indicating the possibility of the influence of American social movement to the American people in Japan, who had connection to the Japanese social movement.

研究分野：西洋史

キーワード：アメリカ　社会運動史　近現代　移民　太平洋世界　大西洋世界

１．研究開始当初の背景

本研究は、研究代表者がこれまで進めてきた以下の 4 領域の研究を発展させるものである。

1）ドイツ・アナーキズム史研究、2）帝政ロシア出身のユダヤ系移民アナーキズム成立史に関する研究（「移動と情報ネットワークの政治学」2008-2010 年、基盤研究 B、「ユダヤ系移民によるアナーキズムの形成と変容に関する研究」2009-2011 年、基盤研究 C、「大逆事件 100 周年記念シンポジウム」2010 年、国際交流基金助成対象事業)、「近代ヨーロッパを中心とする空間的移動の実態と移動の論理に関する比較史研究」2011-2014 年、基盤研究 B、3）移民のトランスナショナル・アイデンティティに関する研究（「アメリカ移民労働史の再検討」2009-2011 年度、基盤研究 C、4）ドイツ系移民と日本の社会運動との関係に関する研究（「影山英子と『フライハイト』紙」2003 年)。

これらの研究により、ドイツ系／ユダヤ系移民アナーキストが、出身地のロシアと移民先の世界各地をつなぐネットワークを基盤にして、国境を越える運動を展開し、それを背景にして、日系移民との関係性を構築していたという事実が明らかになった。このことから、これまで大西洋世界の移民中心にとらえられてきた近現代アメリカ史における社会運動を、大西洋世界と太平洋世界の移民が構築した関係性に着目して捉え直す必要があることがわかった。それと同時に、そのような関係性、および、そこから生まれた社会運動を、国境を越えて移動する人々と彼らの国内外の拠点（出身地と移民先)、およびそれら拠点を結ぶネットワークに焦点を当てて検討することが重要であることも認識した。

以上のようなアメリカにおける社会運動史の再検討は、これまで国民国家の枠組で捉えられ、大西洋世界の移民を中心にして理解されてきたアメリカ史における移民を中心とした社会運動、さらには、欧米世界全体の社会運動史全体の新たな側面を明らかにする可能性を有しているという展望を得た。ただし、そのためには、研究対象・時代・領域を拡大する必要があるため、共同研究を構築することが適切であると認識した。こうして、本研究の課題を設定するに至った。以上のような本研究の課題設定は以下の諸研究から示唆を得ている。

1）アメリカ社会運動ユニオニズムに関する研究：『アメリカ労働運動のニューボイス』(2003)、『社会運動ユニオニズム』（2005） 等では、旧来のヨーロッパ系移民の子孫が、アジア系・ヒスパニック系移民および女性を労働組合に迎え入れることを通じて、現代アメリカ労働組合運動が、人権・環境・福祉等に関する要求を掲げる社会運動ユニオニズムに変容したことが明らかにされ、大西洋世界と太平洋世界の移民が結合した現代アメリカにおける社会運動の事例を示している。しかしその歴史的起源については検討がない。

2）異なる移民集団が結合した社会運動に関する研究：M.-K. Jung, *Reworking Race* (2006)では、ヨーロッパ系・アジア系移民労働者の関係性に着目し、ハワイに移住した北米大陸における労働運動経験者と彼らの働きかけを通じて異なる移民集団の結束がもたらされたことを明らかにし、移民による社会運動とそれを創り出す思考や行動を解明している。ただし、北米大陸からの移住者のネットワークやそれが移民の結束において果たした役割に関する検討がなされていない。

3）南北アメリカ大陸における移民労働者のトランスナショナリズムに関する研究：D. Gabaccia et. al., *Italian Workers of the World* (2001); *Women, Gender and Transnational Lives* (2002）; L. Fink, ed., *Workers Across the Americas, Transnational Turn in Labor History* (2011）では、南北アメリカ大陸における移民労働者による社会運動に関する多様な事例が取り上げられている。しかし、異なる移民間で構築された関係性において移民の国境を越えた移動やネットワークが果たした役割、および、大西洋世界と太平洋世界の移民が創出した社会運動については検討されていない。

4）グローバルな視野からの移民史：大西洋世界と太平洋世界等の移民に関する共同研究（D. Gabaccia, D. Hoerder, eds., *Connecting Seas and Connected Ocean Rims, Indian, Atlantic, and Pacific Oceans and China Seas Migrations from the 1830s to the 1930s*, 2011）では、太平洋世界等の移民史研究を組み込むことで、大西洋世界中心の移民史の相対化が可能であることが示唆されている。ただし、アメリカ合衆国における移民が展開した社会運動がグローバルな文脈からどのように説明できるのか、という点に関しては検討がない。

以上 1）～4)から、大西洋世界・太平洋世界の移民を視野に収め、国境を越える人の移動に焦点を当てることが重要であることがわかった。しかし、現在の社会運動と過去の社会運動をつなぐ研究や、移民の移動とネットワークが社会運動において果たした役割に関する研究がないことも明らかになった。そこで本研究は、歴史上の移民による国境を越えたネットワークに着目しながら、大西洋世界と太平洋世界の移民の間で構築された関係性と社会運動の特質を明らかにすることを通じて、近現代アメリカ社会運動史を再

検討するという課題を設定した。

２．研究の目的

本研究は、これまで一国史の枠組で捉えられ、大西洋世界の移民とその子孫を中心にして描かれてきた近現代アメリカにおける移民による社会運動を、太平洋世界の移民史と接続させ、国境を越えた枠組から再検討することを通じて、国民国家・欧米中心の枠組みで理解されてきた近現代欧米世界における社会運動の新たな側面を明らかにすることを目的とする。とりわけ、19 世紀半ば～20 世紀後半のアメリカ合衆国で、大西洋世界の移民（ヨーロッパ・カリブ海系）と太平洋世界の移民（アジア系）の間で生じた関係性（結合／離反／対立）を通じて成立した様々な社会運動が、国境を越えて移動した人々と、彼らが結びつく国内外の拠点（出身地と移民先）で活動する諸グループから形成されたネットワークによって支えられ、形作られた歴史的経緯に着目して研究を進める。

３．研究の方法

本研究は、個別・具体的な事例に関する調査・分析の後、その相互比較と類型化、それらを総合する作業を通じて、移民を中心とした**社会運動**に関する新たな解釈の枠組みを構築し、**近現代アメリカ社会運動史**を再解釈するという方法を採る。そのために、まず各人が研究担当領域に即してヨーロッパ系／カリブ海系移民者とアジア系移民者との間に構築された関係性と**社会運動**に関する事例を、移民の出身地・移民先の諸活動とそれらをつなぐネットワークに着目し、同時に、労働・政治・文化活動／教育／思想／ライフ・スタイル／日常生活／エスニック・コミュニティ／ジェンダー関係等の諸文脈を視野に収めて、調査・分析の上で提示し、共同討議を通じて、**社会運動**において果たす国境を越えたネットワークの共通性や違い、その特徴を抽出し、新たな枠組に基づく**アメリカ社会運動史**の再解釈を試みる。

４．研究成果

第１に、アメリカ合衆国で様々な社会運動に加わったヨーロッパとアジアからの移民が、彼らの送出国での社会運動と結びつき、そこから影響を受けながら発展したことを明らかにした。第 2 に、大西洋世界と太平洋世界の移民が、アメリカ国内で一つの運動を形成したこと、それらの運動が、移民の送り出し地域に対して影響を及ぼしたことを、とくに日本と中国について明らかにした。第 3 に日本に滞在して日本における運動に接点を持ったアメリカ出身者が、本国の社会運動から影響を受けていた可能性があるという点を指摘した。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　28　件）

2015 年

1）田中ひかる「新しいアナーキズムはなぜ「新しい」のか―思想と運動の変容に関する史的考察」『歴史研究』52 号、2015 年、39-76 頁。

2）篠田徹「グローバル・レーバー　連帯の可能性を求めて　第 2 季（第 2 回）現代の国際労働組合運動（その 1）」『生活経済政策』217 号、査読無、2015 年、24-27 頁。

3）篠田徹「グローバル・レーバー　連帯の可能性を求めて　第 2 季（第 3 回）現代の国際労働組合運動（その 2）」『生活経済政策』218 号、査読無、2015 年、44-47 頁。

4）梅森直之・八尾祥平「東アジアから 1968 年をみつめなおす」『ワセダアジアレビュー』17 号、査読無、2015 年、21-25 頁。

2014 年

5）田中ひかる「日本とアメリカのアナーキストによる国境を越えた交流と連帯」『初期社会主義研究』25 号、査読無、2014 年、80-99 頁。

6）篠田徹「連載　組合時評［3］AFL-CIO の新構想で考える」『生活経済政策』204 号、査読無、2014 年、4-5 頁。

7）崎山直樹「『佳人之奇遇』における国家観―留学生柴四朗の経験したアメリカとアイルランド系移民の接触」『つながりと権力の世界史』彩流社、2014 年、183-205 頁。

8）山口守「作為離散的母語:阿來的漢語文學」『阿來研究（一）』査読有、四川大學出版社、2014 年、148-159 頁。

9）山口守「従雑誌《平等》看無政府主義思想空間的越境性―以巴金與劉忠士的書簡為中心」『現代中文学刊』査読有、華東師範大学出版社、2014 年、30-38 頁。

10）山本明代「移民ネットワークの結節点：ドイツ人移民センター：多様な移動の歴史を知る」北米エスニシティ研究会編『北米の小さな博物館 3』彩流社、査読無、2014 年、214-223 頁。

11）山本明代「民族浄化・ジェノサイド研究の現状と課題」『民族浄化のヨーロッパ史―憎しみの連鎖の 20 世紀』刀水書房、査読無、2014 年、294-321 頁。

12）山本明代「闘う移民と支援ネットワークの形成：1926 年パセーイク・ストライキにおける東欧移民労働者」小沢弘明・山本明代ほか編著『つながりと権力の世界史』彩流社、査読無、2014 年、207-229 頁。

13）大津留厚「収容所を生きる」山室信一ほか編『現代の起点　第一次世界大戦　2　総力戦』岩波書店、査読無、2014 年、81-104 頁。

14）大津留厚「ハプスブルク帝国とコモンウェルス―国籍論の比較を通じて―」山本正、細川道久編著『コモンウェルスとは何か―ポスト帝国時代のソフトパワー―』ミネルヴァ書房、査

読無、2014 年、119-139 頁。
15）大津留厚「言語と民族」山本健兒、平川一臣編『朝倉地理講座—大地と人間の物語— 9 中央・北ヨーロッパ』朝倉書店、査読無、2014 年、179-186 頁。

2013 年

16）田中ひかる ‘The Reaction of Jewish Anarchists to High Treason Incident’ , in: *Japan and High Treason Incident*, 査読無、London/ New York: Routledge, 2013, pp.80-88.
17）田中ひかる「『近代思想』をおもしろく読む三つの方法」『大杉栄と仲間たち『近代思想』創刊 100 年』ぱる出版、査読無、2013 年、118-128 頁。
18）田中ひかる「大杉栄の文章はなぜ読みつがれるのか」『アナキズム』17 号、査読無、2013 年 19-37 頁。
19）田中ひかる「現代アナーキズムの諸潮流サン・ティミエで出会った、動物解放派／ヴィーガン、アナーキスト・ブラック・クロス」『トスキナア』17 号、査読無、8-16 頁。
20）篠田徹「連載　組合時評［1］アベノミクスと労働政治」『生活経済政策』196 号、査読無、2013 年、4-5 頁。
21）篠田徹「連載　組合時評［2］2013 年参院選と労働政治」『生活経済政策』200 号、査読無、2013 年、4-5 頁。
22）梅森直之「「鎖工場」を超えて」『大杉栄と仲間たち『近代思想』創刊 100 年』ぱる出版、査読無、2013 年、14-23 頁。
23）梅森直之「明治ソーシャリズム・大正アナーキズム・昭和マルクシズム」『日本思想史講座 4』ぺりかん社、査読無、2013 年、257-294 頁。
24）梅森直之 ‘The Historical Context of High Treason Incident: Governmentality and Colonialism’, in: *Japan and High Treason Incident*, 査読無、London/ New York: Routledge, 2013, pp.52-64.
25）梅森直之 ‘Appropriating Defeat: Japan, America and Eto Jun’s Historical Reconciliation’, in: *Inherited Responsibility and Historical Reconciliation in East Asia*, London / New Yok: Routledge, 2013, pp.123-144.
26）梅森直之 ‘Between Civilization and Anti-Civilization: the Ideology and Activism of Early Asianists’, in: *Regional Integration in East Asia*, Tokyo/ New York/ Paris: United Nations Press, 2013, pp.241-263.
27）山口守「作為契機的鄉土文学」『中国現代文学』第 24 期、台湾：中国現代文学学会、査読無、2013 年、21-42 頁。
28）山本明代「近代社会のダイナミズム：移民」大津留厚ほか編『ハプスブルク史研究入門』昭和堂、査読無、2013 年、168-173 頁。

〔学会発表〕（計　22　件）

2014 年

1）田中ひかる「Act Right Now: Global Anarchism, It’s Vicissitude and Range」Anarchy Alive!（招待講演）東京外国語大学、2014 年 12 月 14 日。
2）田中ひかる「虐殺を世界に伝えたアナーキストの情報ネットワーク＋IWW コネクション」橘宗一墓前祭／講演会、2014 年 9 月 15 日、愛知芸術文化センター。
3）田中ひかる「Bakunin and Japanese Anarchist」International Conference for Bicentennial of Mikhail Bakunin、2014 年 7 月 12 日、Pryamukhino, Russia
4）田中ひかる「ロシア出身のユダヤ系移民アナーキストによるアメリカ合衆国における活動　1905-1920　移動／移民と思想／運動形成の関係」第 64 回日本西洋史学会賞シンポジウム「移民」概念の再検討とグローバル・ヒストリー、2014 年 6 月 1 日、立教大学。
5）崎山直樹「アイルランド移民ネットワークの形成と土地戦争—反帝国意識と女性運動の共鳴」、第 64 回日本西洋史学会賞シンポジウム「移民」概念の再検討とグローバル・ヒストリー、2014 年 6 月 1 日、立教大学。
6）篠田徹「I.W.W.を通して見たトランスアトランティック運動史」、第 64 回日本西洋史学会賞シンポジウム「移民」概念の再検討とグローバル・ヒストリー、2014 年 6 月 1 日、立教大学。
7）山口守「我的台灣文學研究年代記並近二十年台灣文學研究於日本」2014 年 3 月 19 日，台湾大学文学院日本研究中心。
8）山口守「「巴金與愛瑪·高德曼：1920 年代國民革命中的無政府主義」『赤』的全球化與在地化：二十世紀蘇聯與東亞的左翼文藝學術研討會，台湾：中央研究院文哲研究所，2014 年 6 月 5 日
9）山口守「超越本質主義漢語文學華語文學如何可能」2004 马来西亚华人研究国际学术双年会，Hope College, Kuala Lumpur, Malaysia, 2014 年 6 月 21 日
10）山口守「パラダイムとしての中国文学の限界：漢語文学・華語語系文学の視点から」中国社会文化学会，東京大学東洋文化研究所，2014 年 7 月 6 日
11）山口守「巴金與欧美無政府主義者間的往来書簡研究」第 11 届巴金学術研討会，中国作家協会・上海市作家協会・巴金研究会・巴金故居，2014 年 11 月 22 日
12）山口守「「中国行きのスロウ・ボート」旅としての“中国”」「村上春樹と中国」国際シンポジウム，中国上海・杉達大学外語学院日本語学部・日本文化研究所，2014 年 12 月 6 日
13）山口守「パラダイムとしての中国文学の限界：漢語文学・華語語系文学の視点から」，高麗大学校文科大学—日本大学文理学部共同学術会議，韓国・高麗大学，2014 年 12 月 23 日

2013 年

14）田中ひかる「グローバル・アナーキズムから見る日本アナーキズム史」国際シンポジウム「グローバル・アナーキズムの過

去・現在・未来～日本とアジアをつなぐために」明治大学、2013 年 11 月 18 日。
15）梅森直之 'Between Universal Republic and Emperor System: Recent Transformation of Democratic Leadership in Japan'、2014 年 12 月 18 日、Routledge Series of Political Theories in East Asian Context, International Symposium （招待講演）, Members Hall at National Assembly of the Republic of Korea.
16）阿部小涼「1950 年代-70 年代と沖縄の黒人兵シカゴ、ニューヨークのプエルトリコ移民世界」第一回科研「近現代アメリカ社会運動の再検討―太平洋世界と大西洋世界をつなぐ視点から―」研究会、琉球大学、2013 年 6 月 28 日。
17）阿部小涼「沖縄の反基地運動と直接行動の倫理」西南学院大学「マスメディア実践論」2013 年 6 月 31 日、西南学院大学。
18）阿部小涼「危機の時代の研究と運動：調査する市民の権利と研究者」沖縄平和学会 2013 年度大会、2013 年 10 月 20 日、琉球大学
19）阿部小涼「廃墟の大学を散歩しなければならない」関西学院大学「社会変革の現在」班第 1 回研究会、関西学院大学先端社会研究所 2013 年度第 4 回定期研究会、2013 年 12 月 1 日、関西大学大学院先端社会研究所。
20）山口守「巴金與高徳曼：1920 年代国民革命中的無政府主義」Bajin and Emma Goldman : Anarchism during the National Revolution in 1920s 「"世界視野中的中国文学研究"国際研討会」2013 年 9 月 14-15 日, 中国北京：中国社会科学院文学研究所。
21）山口守「作為離散的母語：阿来的漢語文学」『流転中的文学：第 10 回東亜学者現代中文文学国際研討会』2013 年 10 月 25-26 日, 中国香港：香港教育学院。
22）山本明代「『移民の国』アメリカにおける非自発的移動」日本アメリカ史学会シンポジウム A、2013 年 9 月 21 日、立命館大学。

〔図書〕（計　8　件）
2014 年
1）田中ひかる・飛矢崎雅也・山中千春（編著）『グローバル・アナーキズムの過去・現在・未来～現代日本の新しいアナーキズム』関西アナーキズム研究会、2014 年、全 176 頁。
2）山本明代（共著）、北米エスニシティ研究会編『北米の小さな博物館』彩流社、2014 年、全 326 頁。
3）山本明代・崎山直樹（共著）、小沢弘明・山本明代・秋山晋吾編著『つながりと権力の世界史』彩流社、2014 年、全 231 頁。
4）山本明代（訳）ノーマン・M・ナイマーク（著）『民族浄化のヨーロッパ史―憎しみの連鎖の 20 世紀』刀水書房、2014 年、全 371 頁。
5）阿部小涼（訳）ジョン・ミッチェル（著）『追跡・沖縄の枯れ葉剤：埋もれた戦争犯罪を掘り起こす』高文研、2014 年、全 256 頁。
2013 年
6）田中ひかる・梅森直之（共著）、Masako Gavin/ Ben Middleton ed. *Japan and High Treason Incident*, London/ New York, Routledge, 2013, 262pp.
7）田中ひかる・梅森直之（共著）、大杉栄と仲間たち編集委員会編『大杉栄と仲間たち『近代思想』創刊 100 年』ぱる出版、2013 年、全 338 頁。
8）大津留厚（編著）・山本明代（共著）、大津留厚ほか編『ハプスブルク研究史入門』昭和堂、2013 年。

６．研究組織

(1)研究代表者
田中ひかる（TANAKA　Hikaru）
大阪教育大学・教育学部・教授
研究者番号：272774

(2)研究分担者
阿部小涼（ABE Kosuzu）
琉球大学・法文学部・教授
研究者番号： 292722

崎山直樹（SAKIYAMA Naoki）
千葉大学・普遍教育センター・講師
研究者番号：10513088

篠田徹（SHINODA Toru）
早稲田大学・社会科学総合学術院・教授
研究者番号：60196392

山口守（YAMAGUCHI Mamoru）
日本大学・文理学部・教授
研究者番号：70210375

梅森直之（UMEMORI Naoyuki）
早稲田大学・政治経済学術院・教授
研究者番号：80213502

山本明代（YAMAMOTO Akiyo）
名古屋市立大学・人文社会系研究科・教授
研究者番号：70363950

大津留厚（OTSURU Atsushi）
神戸大学・人文学研究科・教授
研究者番号：10176943